

ファーウェイの次世代ネットワーク戦略 TD-LTEとクラウドにフォーカス

ファーウェイ・テクノロジーズが10月、日本のプレス向けに説明会を開催した。中国・深圳の本社で、ファーウェイの担当者にTD-LTE、クラウドなどフォーカス事業分野の戦略を聞いた。

文◎末岡洋子(ライター)

世界的にLTE導入が少しずつ進んでいるが、その中でTD-LTEを採用する通信事業者が出てきている。TD-LTEは中国の3G規格であるTD-SCDMAの発展版となり、最大手のチャイナ・モバイルが導入を決定している。日本でも、9月末にソフトバンクモバイルが発表した「SoftBank 4G」で一気に知名度が上がった（SoftBank 4Gは傘下のWireless City PlanningのAXGP方式だが、AXGPはTD-LTEと仕様はほぼ同じ。ソフトバンク側も互換性があるとしている）。

TD-LTEについて説明したキウウ・ハン氏は、さまざまな仕様がLTEに集約されるという流れの中で、TD-LTEに向かう経路としてWiMAXと3Gの2つがあると述べる。WiMAXはTDD方式で、次世代システムとして自然な流れといえるが、FDDベースの3G事業者の中にも周波数の問題からTD-LTEを選択するところがあるという。

仕様はLTE-FDDとほぼ同じ

TD-LTEの将来性については、繁栄に不可欠な要素が揃っているとキウウ氏。「TDDといってもFDDのLTEとほぼ同じ。90%同じと

よい」。これは、「ほとんどの場合、同じ端末でTDDとFDDが使えることを意味する」という。チップセット側では、デュアル、マルチモードの開発が進んでおり、ファーウェイもTD-LTE、LTE-FDD、UMTS、CDMA、GSMとすべてのシステムに対応したデータ通信カードを作成している。

キウウ氏はまた、通信機器側でもエリクソンなどの主要ベンダーが提供していると述べ、エコシステムの面でも素地が整っていると強調した。

TD-LTEを推進するGlobal TD-LTE Initiative (GTI)の加入社だけでも、チャイナ・モバイルが6億人、インドのパーティが2億人のユーザーを持つ。キウウ氏によると、ボーダフォ

ンも関心を示しており、「3社だけで10億人に達する」と潜在市場を語る。このようなことから、TD-LTEには高い将来性があるといえそうだ。

TD-LTEでリードする

TD-LTEは現在、中東のWiMAX事業者モビリーがサービスインしており、ソフトバンク、チャイナ・モバイルなどが続く。ファーウェイはこれらの通信事業者に採用されており、ポーランドのAero2とも商用契約を締結しているとキウウ氏は胸を張る。さらには、世界初の商用LTEサービスを開始した北欧のテリアソネラなど「LTE-FDDでの経験も活かせる」と続ける。

製品としては、コアネットワーク、アクセスネットワーク、アプリケーション、端末とすべてを提供する。なかでも基地局側では、TD-LTE、LTE-



ファーウェイ本社は
新興都市・
深圳にある